

美紗の会

たより

川の流れのように

西松 布咏

この秋の越後は賑わっていた。

義と愛に命を懸けた直江兼続のドラマ「天地人」の歴史ロマンを訪ねる旅。

かたや新潟全域で七月から展示されているアートが呼び起こす「水」の記憶、「土」の匂いをビジュアル化した「水と土の芸術祭」の見学とで。

まさに新旧が融合する祭り、雄大に流れる信濃川が鏡の煌きをたゆたしながら静かに暮れようとしている。

十一月八日若室温泉「高島屋サロン・江戸の粋」公演の前日に新潟万代橋ほとりに宿をとり、木々の色づく川べりを散策し、展望台から紅の帯を解きながら沈んでゆく夕陽を眺めた。秋の行事もこの旅で最後と思ひながら…。

春から続いた鶺鴒がそろそろ終わる十月五日の宵【舞と唄の夕べ】を料亭【美乃壺】で開催した。木枠の窓に広がる長良川のせせらぎと微かに聞こえる虫の音が忍びよる大座敷の行燈のもとに大勢のお客様が集ってくださった。幕開きに関西随一の舞手・大和松時師の上方唄「ぐち」を。あいだに語りと秋によせる江戸唄をはさみ、身も心も細るせつない恋の地唄「名護屋帯」の共演で終えた。

岐阜の出稽古から二年の月日に眺めた長良川での嬉しい宵であった。

一六〇三年徳川家康の江戸開府に架けられた日本橋。四百年余りたった今、江戸から現代へ伝統と進取を紡



ぐ街へと変貌しつつある中心地「マングリンオリエンタルホテル」の二階チャペルホールで十月半ばの午後のひととき「江戸の粋」をお客様に楽しんでいただいた。セレモニーホールとしても使用するために声が響くようにと大理石の壁が異国情緒をかもし出し、椅子に腰掛けブルーの着物での江戸唄は、江戸から東京へと渡る屋形船のようだった。

十月二十四日小春日和の柔らかな陽ざしが障子に差し込む赤坂・泉クラブの大広間で第三十八回【美紗の会】のつどいを催した。若手連による「蓼三番叟」で賑やかに幕開けし、入門半年の池田玖莉子さんが、日頃生徒に指導しているピアノの旋律とは違う邦楽の間に苦しみながら唄った「ことぶき」の見事さは先輩諸氏の溜息を誘った。続いて次々と唄・三味線コンビによる曲がよどみなく演奏されてゆく。苦勞した邦楽の間のずれを会得してくれている…と屏風の陰で師匠冥利をしばし味わった。長唄「菖蒲浴衣」を六人で賑や



かに演奏しお待ちかねの休憩へ…。会を追うごとに若いお客様が増えてゆくのが嬉しく、ビールを囲んでの会話も華やいている。やがて昨秋のテレビドラマ「悪魔の手毬唄」の三味線指導が入門のきっかけとなった、かたせ梨乃さんがNHKドラマの銀座ロケ中に駆けつけてくれる。流石に舞台度胸満点の「有明」を落ち着いた美声で唄い、男性陣をうっとり。

加藤さんの軽妙な司会が緊張の空気を和らげ時には笑いも誘い、中堅からベテランの曲へと進んでゆく。そしてお待ちかねの花柳千寿文師と会主による小唄ぶり「浦こぐ舟」「日吉さん」で今回も見事な芸を披露していただき恒例の「美紗の会のつどい」を終えることが出来た。

ゆつくりではあるが、あたりは伝統から変革へとの刻まれるなか、それぞれに精進し共に集い、新潟の夕暮れに感じた新旧が融合し刺激しあう心の架け橋となりたい、そしてこれからも川の流れるように三味線と共に歩み続けて行きたいと思うこの秋であった。

伝えるということ

藤澤 優



思えば布詠師匠の唄を初めて聴かせて頂いたのはいつ頃でしたか……。

張りのある艶やかな存在に心地よい響き覚えたその場で、ボクの頭の中では文楽人形が舞の軌跡を描いていました。それから何度となく演奏会に出かけては師匠の演奏を聴かせて頂きました。

十一月八日の岩室温泉にある高島屋でのサロンもその一つ。小唄、端唄、長唄と、それぞれの曲の風景や情緒などの紹介を交えての演奏は、平素聴きなれない詞章の奥深い意味が掌に乗るようで、やがてそれらが

映像となって見えないスクリーンに映し出されていきます。唄の解説は時に親切であり時には無粋となりまゝです。聴きなれていての方々に解説は不要なものでしょうが、耳慣れている方が少ない時には、普及として広げる意義だけではなく、演者が伝えようとする心と聴衆が知りたいという心を結びつけるコミュニケーション・ツールでもあるのです。粋な伝え方もあれば俗っぽいものもあり、聴衆の傾向をいち早く察知することの大事さを痛感します。また、別の見方をすれば、一期一会のスリル感もあるはず。この日、集まられた地元のお客様も、唄の意味を理解され、布詠さんの気持ちや伝わってきた、そして皆様一様に日本の唄の良さを改めて認識されていました。演者の伝えなかったものが聴衆に伝わったのです。演者にとってこれほど嬉しいことはないかもしれません。

目の前にいらつしやる聴衆の皆様自らを伝えるのは当然なこと。少し先を見据えながら、少しでもその“存在”を知って頂き、広める目的で伝えることも大事なことです。目の前の方々に、そして、広げていく過程での存在認識を目的とした方法では、伝え方は変わるものです。

私が人形浄瑠璃文楽を制作するときも基本は同じです。文楽はユネスコの世界無形遺産に宣言され、チケットが取り難いなど近年は文楽を楽しむ方が増えたことはとても嬉しく思います。しかし、先達が全国を自らチラシを撒きながら演じるなど消滅の危機を何度も乗り越えながら文楽の心を伝えた礎があったからこそ今に伝えられているのです。そんな想いを文楽だけでなくほかの伝統芸能でも、それぞれにかかわる今の人たちが将来を見据えて伝えていくからこそ後世に残るのです。

布詠師匠の伝える江戸唄の心。江戸から東京へと、そこに居た男たちや女性たちの息吹。情景や風景が心

象風景となり唄の心が伝わります。なんと素敵なお仕事でしょう。

これからも末永く継続して頂きたいという想いが、布詠師匠の江戸唄で文楽人形が舞い、義太夫節と三味線の域とリミックスして、新たな江戸唄と文楽を伝えたいという想いが芽生えました。想像して下さい。存在感のある布詠師匠の江戸唄に文楽人形が舞うのです。制作する側も願ってもないことです。

来春、布詠師匠に文楽人形の名手、三世桐竹勘十郎と共演して頂きます。床の豊竹咲甫大夫、鶴澤清志郎の若手も参加する、江戸唄と文楽の贅沢なリミックス・イベント。さて、皆様にどんなことが伝えられるか、今から心待ちにしております。

三味線の愉しみ

山口 洋文

色づいた柿の葉がひらり、ひらりと落ち始めた初秋。神田明神の隣、宮本公園内に移築された風格ある日本家屋「神田の家」で、新日屋の神田名人会と銘打ち、西松布詠さんの演奏会を開催させていただきました。

神田の家はNPO法人「神田の家」が管理する千代田区指定文化財です。江戸から続く材木商遠藤家の住宅兼店舗であったこの建物は、今ではあまり見掛けなくなつたどつしりとした二階建ての木造建築で、訪れる人を懐かしい風景に誘って郷愁を呼んでいます。

弊社は運営事務局として、神田の家の文化イベントを任せ、江戸の総鎮守神田明神がある土地に相応しい文化イベントとは何かを様々考えつつ、いくつか試行錯誤をしながら催しをしております。

十五人も入ればいっぱい、二階の座敷を使った、あの空間に相応しい催しは何かを考えた時、まず思い浮かんだのが布詠さんの三味線でした。

これまでも伝統文化をどうやって身近に出来るかを考えながら事業を行っておりますが、その中でも重要だと思っているのが、その芸能・文化に相応しい空間のことです。

これは常々思ってきたことですが、三味線を始め邦楽の魅力とは決してマイクを通して大ホールで聴くことではなく、少人数で、生の音に触れることで、初めてわかるのではないかといいたいです。そうでないと本当の芸の素晴らしさを知ることが出来ないのではないかといいたいと思います。ですから、神田の家を見たときに、「ここだ！」と思いました。ここで三味線の演奏会をやりたい、と。そして実際にやってみて本当に良かったと思いました。

長月二十六日、日が暮れかかり、虫の音が一層賑やかになる刻限に始まった演奏。室内の照明はほんほりだけに、窓は開け放ちました。時折夜風が肌をなでるように吹き抜けます。屏風の前で、静かに爪弾かれる弦の音。そしてせつない、時に情念のような恋の唄。肌に染入るような心地でした。

江戸の人たちはきつとこんな風に三味線を楽しんでいたのではないのでしょうか。今こうして虫の音と夜風を感じながら聴いている、この時間こそ本来の三味線の愉しみ方ではないか、そう感じながら堪能させていただきました。

参加されたお客様も「一期一会の演奏会だったわ」と大変感動された様子でした。

戦後、経済的利益のみ追求してきた現代社会で、我々が置いてきてしまった「愉しみ」を、これから神田の家のような相応しい空間で、相応しい芸能に触れることで、昔を懐かしむのではなく、本当の贅沢とは何かを皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。その第一歩を布咏さんの演奏で始められたことをとても光栄に思います。



ファドの孤愁・江戸唄の儂

荒川 琢

七月の暑さから逃れるべく意気揚々と軽井沢へ向かったところ、めずらしく蒸し暑さを感じる軽井沢でした。それでもいつものと変わらない清々しい景色には爽やかな安心感がともなう。日差しをもとめて高く伸びた樅の木に囲まれた会場は、楽しい交流の場をつくるために設計された個人の別荘で、広く天井の高いリビングは、さながら小さなコンサートホールのようである。

「薊の会」と名付けられた交流の場は、昨年の五月に始まったばかりですが、若輩者の私はこの会を一年の密かな楽しみとしていた。「ファドの孤愁・江戸唄の儂」と題された今回は、香川有美さんのファド、中村ヨシミツ氏のギターそして布咏先生の江戸唄、さらには寺田農さんの語りというなんとも贅沢なプログラムでした。おそらくファドと江戸唄を「観る、聴く」

体験は、今までなかったに違いなく、案内状をいただいたときから、その題目に強く惹かれていました。演奏会では私の想像をはるかに越える状況を目の当たりにしたのです。演奏のはじまりと同時に降り出した激しい雨によって、会場は音楽（あらゆる音）に包み込まれたような濃密な空間になりました。あたかも自然現象までもが演奏の一部と化し、唄の世界までもが物理的な大気の変化に呼応するかのごとく身体に浸透してゆきました。唄と自然現象が二度と遭遇することのできない場を生み出し、感性をわしづかみにされたような濃密な時間は、あつという間に過ぎていきま

した。演奏の光景は今でも記憶に鮮明に残っているのですが、身体で感じたものは、夢をみているような儚いできごとのものでありました。

このような場所にいられたのも、そもそも五年ほど前、屋形船の中で布咏先生の唄を聴いてからが始まりであつたと思います。グローバルな世の中ゆえに、日本の美しいところをあまり意識していなかった自分をその時痛感しました。お釈迦様と阿弥陀様の見分けはできるけれども、小唄、端唄、地唄となると、今でもまかりなりません。私の感性や価値観に大きな変化をもたらしたきっかけとなりました。

伝統芸能や日本的なるものの美しさに素直に対峙できるようになったことは大きな楽しみを得た喜びに等しく、さらには自身の建築の仕事にも少なからず刺激となりました。建築設計は空間に芸術的な仕掛けを施す仕事とも言えます。ゆえに感性の変化が設計に大きく作用するわけですが、布咏先生のように前衛芸術との融合、可能性を探る果敢な姿勢が大きな励みとなつたことは言うまでもありません。

日本の美しさを現代建築で表現すべく日々精進あるのみ。気は長く心は広く色薄く勤めは固く身をば持つべし。

《岐阜たより》

岐阜小唄の会のいん

水谷 博昭

私の机上に岐阜小唄の会結成を呼び掛ける案内状が置かれている。昭和六十三年吉日の日付で呼掛け人には、現在もこの会の会長をしておらっている弁護士の葛西栄二先生、前消費者庁長官で衆議院議員である野田聖子先生等四名の名前が連なっている。内二名の人は既に故人になっているし、野田先生の肩書きはまだ



「岐阜県会議員」である。二〇年前の古い懐かしい話である。

岐阜という田舎では粋な小唄に接する機会も少ないためか、一度入会すると途中で辞める人は少なく、メンバーの入れ替わりの少ない三〇人余の同好会として今に至っている。勿論、メンバーの中に唄の才能の優劣があるのは誠にやむを得ないところであるが、会の中で唄の上手下手を言うのは禁句である。全員が内心は俺が上位五本の指に入っているから。毎年、夏はゆかた会、冬は新年会という身内だけの発表会兼懇親会をするが、唄う順番も宴会の席順も入会順という慣例が厳しく守られている。発表会では自分の順番が終わるとビールを飲んで緊張をほぐすことが出来るが、私は入会順から言うとき古参だから、毎回、後から四番目ぐらいで唄わされるので緊張時間が他の人に比べて長く、損だと思っている。一回ごとに順番を逆にすればよいと思うが、この会の絶対権力者である原信行事務局長が認めてくれない。発会から二〇年が経ったので、才能豊かで練習熱心な人とそうでない人の歌唱力の差が大きくなって来ており、上手な人は師範級だが進歩の遅い私のような者は下の方でどんぐりの背比べをしている。しかしみんな俺は上位五本の指には入っていると思っている。だからやめない。

私について言えば、そのような自惚れは持つておらず、もう少し熱心に練習すればもう少し上手になるかも知れないが、まあこれでいい、辞めずに長く続けることに意義があると思っている。従来、会名を草薙会と称していたが、わけあって二年前に会名を粋艶会に改め全員が西松布師匠の門下に入って、その指導を受けることになった。岐阜の田舎にはるばるおいでいたいて、うだつの上がらぬ弟子達を根気良く指導していただいているので、いつか東京のお弟子さん達にひけを取らない上手になりたいと思っている。

《今後の公演予定》

平成二十二年二月二十二日(月)

貞女の夢・夢

文楽×江戸唄リミックス

文楽人形遣い 桐竹 勘十郎

唄と三味線 西松 布咏

豊竹 咲甫大夫

鶴澤 清志郎

会場 池上実相寺

開場 十八時

開演 十九時



■ たより第64号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

■ 美紗の会

主宰 西松 布咏

稽古場 港区白金台三・二・二

白金台プレイス 三階

電話 (三四四一) 二七二六

(五四四七) 二四二二

E-mail: nfue@soleil.ocn.ne.jp

URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misa5/